

続

## 心が育つということ

### 堀合文子先生に学んだこと

豊田一秀

夏号に向け、机に向かっている現在は、実は三月である。昨年、平成二十三年の四月十八日に堀合文子先生が九十歳で亡くなられて、はや一年が経とうとしている。この連載に哀悼文を執筆することがふさわしいかどうか悩む気持ちがあったが、自身の心が、堀合先生にどのように育てられたのか触れておくのも、「心が育つということ」という、この連載の主題に通じるのでないかと考えた。今回は思い出を交えながら、私が堀合先生に育てられたモノは何であったのか、書きつづりたいと思う。

堀合先生はある意味で、日本で最も有名な保育者の一人であったといえる。倉橋惣三先生から直接の教えを受け、昭和十五年よりお茶の水幼稚園（正式には東京女子高等師範学校附属幼稚園）で教鞭をとられた。

昭和六十一年にお茶の水女子大学を退官された後も、十文字幼稚園で担任をされた。その後、八十歳を過ぎても現役でいらした堀合先生は、まさにその一生を「行（ぎょう）の人」



として通された保育者である。

この間に、堀合先生に育てられた保育者は数限りない。当時、お茶の水幼稚園で毎週行われていた保育参観には、毎回、保育室に入り切れないほどの参加者が全国から集っていた。また、大学やさまざまな講習会は言うに及ばず、外国にも行つて保育の指導をされていた。

私は、昭和五十二年よりお茶の水幼稚園に奉職したので、堀合先生の四十六年にわたるお茶の水時代の中、最後の九年間を一緒に過ごさせていただいたことになる。その中で、最初の二年間、私は、副担任として堀合先生のクラスで勉強する機会を得た。先生の指導を受けた保育者は多いと思うが、二年間もの間、先生のクラスで教えを受けた者は私ぐらいではなかったかと思う。

## 厳しさ

堀合先生の保育を間近に拝見して、初めに感じたことは「厳しい先生」ということであつた。堀合先生は、細かく子どもの世話をされ、製作の援助をされるが、直接にはあまり子どもと遊ばない。堀合先生が「それはしないのよー」と言うと、子どもは先生に従う。先生にはある意味での権威があつて、子どもは先生に口答えするようなことはなかった。私には、堀合先生の前では、皆、良い子になつてるように感じられたのである。

保育の深さについて何もわかつていなかった当時の私は、皮相的な意味で、子どもの近くにいたいと考えていた。子どもと遊ぶのが楽しくて仕方がなかったのだ。そんな私であつたから、先生は、子どもと遊ぼうとする私をしばしばたしなめられた。「子どもは、遊んであげて

はダメなのよー」もっと、目立たないように子どもと遊びなさい！」

「このことに関連して、こんな一事もあつた。子どもたちが朝顔の苗を鉢に植えようとしている時である。鉢の底にある水抜き穴から土がこぼれないように、小石を穴の上に置くのだが、先生は、ちょうど良い大きさの石を探してくるように子どもに話した。

少し甘えん坊の女兒が私のところに来て、石を見つけてと言うので、私は深く考えることもなく、欠けて使えなくなった植木鉢を落として砕くと、良い大きさの破片を与えた。それを見て、堀合先生はあわてて飛んでみえると、すぐに、私に破片を片付けさせ、独り言のように、あなたは私の保育がわかつていないと言われた。せっかく、子どもに考える機会を与えたのに、私が、あまりに安易に子どもに応えたことへの先生の憤りであつた。私はそれほどに初心者であつたのである。

信頼関係の上に立ちつつも、子どもの遊びの世界に立ち入らないように細心の注意をされる先生の姿勢は、晩年、いっそう強くなったように思う。その理由として、子どもを取り巻く生活全般が大きく変わってきた点を挙げられている。

子どもが、「子ども時代」を生きられるような環境が貧しくなり、自分で考える力が減少してしまつた結果、子どもの「遊ぶ力」が弱くなり、大人の意向に対して敏感になり、すべてにおいて受身になってきている……。このような状況にある子どもたちを保育するには、以前のような接し方では対応し切れない。先生は繰り返し話されている。

このような、堀合先生の子どものとの距離感の変化は、時に保育関係者に誤解も与えてきたように思う。保育者ももっと子どもの近くにいて、教え、一緒に遊ぶべきではないのか……

といったたぐいの批判である。

## ややつね

子どもとあまり遊ぶことのない先生であったが、先生が子どもをかわいがらなかつたのかといえ、そのようなことは決してなかつた。今、思うに、先生は強い意志と使命感で、子どもと遊ぶことを「我慢」していらしたのだと思う。

五歳の三学期、庭には沈丁花（ジンチョウゲ）のつぼみが膨らみ始め、子どもたちは、園庭でそれぞれの遊びに没頭していた。春の日差しの下、さまざまな遊びが花開き、何とも言えない穏やかな調和に満ちている午後であった。子どもたちに、お帰りを告げに行かれた先生は、七〇センチほどの高さの、斜面の土留めコンクリート壁で遊ぶわんぱくグループのところに行列されると、子どもに背を向けられ、一人をおんぶして保育室まで連れていかれた。それを見た子どもたちは、われもわれもと集まってきて、壁は子スズメが電線に止まっていたようなありさまとなった。先生は、子どもを一人ずつおんぶされては、ニコニコと保育室まで行き来された。子どもたちのうれしそうな顔、顔……。私は、うれしいような気持ちとともに、先生と子どもたちを邪魔してはいけないような気持ちで、遠くから見守るばかりであった。私が出る幕ではなかつた。こんな、堀合先生と子どもたちの光景を目にしたのは、おそらく私だけだと思っている。

卒業式が近づいたある日、見学に見えていた保育者が保育後に先生に質問した。「こんなに

手塩にかけて子どもたちが卒業してしまつて、先生は寂しくありませんか?」。先生は、さも意外なような顔をされて、「アハハ、四月になれば、また次のが入つてきますからね!」と答えられた。この答えには驚かされた。子どもたちとの別れが近いことに、少し感傷的になつていた私だつたからである。

そして、卒業式の当日、朝、子どもと保護者が部屋に集まつた時、「ご卒業おめでとうございます」と言われた後、少し間が空いて、先生は突然、ワーツと声を出して泣かれた。それは、あまりに唐突で、子どもも父母もあつげに取られ、「もらい泣き」もできない感じであつた。数秒後、先生は泣きやまれ、何もなかつたかのようにその日の予定など話されて、私たちは子どもたちと大学講堂へ向かつた。

その後、式の間も、それに続く謝恩会での席でも先生は泣かなかつた。目を赤くはらしている父母や子どもをよそに、先生は終始にこやかであつた。この一事の中に、先生の、経験を積んだ保育者としての矜持を見たように思つた私であつた。

堀合先生は、倉橋先生の「子どもたちと野原に寝転んで一緒に空を見る、保育はそれで良いじゃないか」という言葉が大好きだと、何度も語られている。

常に自分に厳しくありつつ、子どもとの「今」を真剣に生き続けた先生であつたと、今にして思う私である。

(玉川大学)